シリーズ 第54回

陶馬と水甕に込められた祈り

奈良・平安時代の、平城京・長岡京・平安京などの都の遺跡から、しばしば素焼きの馬の形をした土製品が出土します。低温で焼かれた茶褐色のものを「土馬」、高温の窯で焼かれた灰色のものを「陶馬」といい、川のそばや溝から出土することが多く、水に関わりのある祭祀に用いられたと考えられています。完全な形で出土することはなく、祭祀の後にはバラバラに破砕して廃棄していたようです。

こうした風習は、都を中心に広まっていったようで、なぜ馬と水が関係あるのかと疑問に思うかもしれませんが、平安時代初期に編纂された歴史書『続日本紀』の天平宝字七年庚午条（七六三年五月二十八日）に、「日照りのため、丹生川上神社（雨の水神を祀る神社）に黒毛の馬を奉納した」とあり、宝亀八年五月癸亥条（七七七年五月十三日）には「長雨のため丹生川上神社に白馬を奉納した」と書かれているように、雨乞いには黒馬を、長雨の時には白馬を水神に献じていたという風習が、馬形土製品と水の祭祀を結びつける根拠となっていると思われます。

久田原遺跡の陶馬

杉遺跡の陶馬（上半身部分）

杉遺跡の土馬（胴体部分）

馬形土製品に、茶褐色の土馬と灰色の陶馬の二種類があるのも、この黒馬・白馬の区別をつけていたのかもしれません。

鏡野町内にもこの土馬・陶馬が出土しています。久田原遺跡（久田下原）からは、目鼻やたてがみなど写実的に表現された陶馬が出土しています。杉遺跡（杉）からは陶馬と土馬の胴体部分が出土しており、土馬には赤色顔料を塗っていた形跡がみられます。また、両遺跡共に複数個体分の脚の破片も出土しています。これは、都の習俗がはるか美作の奥地にまで伝わっていたことを証明するもので、久田原遺跡では、官衙（役所）的な施設の存在が指摘されていることから、都の文化や風習を知る役人達が久田原遺跡の地に存在し、その上流部に位置する杉の集落にも伝わっていったと考えるのが適当でしょう。

実はこの両遺跡から出土した陶馬は、水甕の破片と共に出土したという共通点があります。都や他の地域からは水甕と共に陶馬や土馬が出土したという事例が見られない中で、吉井川上流域の近接する遺跡から水甕を伴うということは、水甕を用いた祭祀はこの地域で行われていた独自の風習だったのかもしれません。おそらくお酒など水の神への供物を入れていたのでしょう。そこに馬形土製品が伝わり、都の先進的な風習をそのまま取り入れるのではなく、それまで行われていた在来の風習も交えた新しい形で祭祀を行っていたと思われます。

どちらの遺跡も吉井川に近い河岸段丘上に存在している遺跡です。陶馬が先に述べた白馬をイメージして作られたものだとすれば、大雨や長雨による川の氾濫から集落や田畑を守るために水の神に捧げられたのかもしれません。

こうした出土遺物のありかたから、奈良時代の律令国家による地域支配が国の隅々にまで及ぶ中で、新しい文物を受け容れながらも、旧習との共存を模索した古代人の悩ましい様子がうかがえます。

久田原遺跡の陶馬は、奥津歴史資料館に展示しています。

参考資料：『続日本紀』、『奥津町史』資料編、『杉遺跡』

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/